

する専門家としての道を選ぶということが、しばしば生じました。あるいは、三里塚闘争もベトナム反戦運動も他人事で、わが身は最先端の科学の研究に没頭する。しかもその結果の業績が国家やアカデミズムによって高く評価される。こういう世界は過去も現在も厳として存在しています。困難なのは、専門家としての高度な訓練は必要であり、しかし場合によっては専門家であることを二の次にできるか、ということでしょう。高木さんの場合、持って生まれた優れた資質と恵まれた生育環境、研究者になってからはすでにお話ししたような時代の影響を大きく受けたと言えると思います。

高木学校をつくるに当たっては、何度か仲間内の少人数の科学者で議論をしました。高木さんの問題意識を引き継いでいく人たちをどう生み出していくかが焦点でした。NHKで一九九九年二月六日に「科学を人間の手に——高木仁三郎・闘病からのメッセージ」という番組が放映されましたが、まさに「科学を人間の手に」取り戻すために、高木学校を設立したのです。

まるでシェイクスピア劇の場面にあるような、民衆と完全武装した機動隊との実力闘争の経験を次の世代の人たちに受け渡し、「いのち」をつなげていくことは、私たちの世代の大きな責任ではないかと思います。高木仁三郎さんは、そのために全力を出し切って、あの世へ旅立った人でした。この講義のために、昔の資料を調べ、高木さんと無言の対話を半年ほどしてきて、私自身その責任を痛感しています。

### Ⅲ ただの市民が戦車を止めた運動

#### ベトナム行き戦車搬送阻止闘争

「ただの市民が戦車を止めた運動」という表現は、じつは正確さを欠いています。戦車を止めた運動には、社会党や共産党、地区労、自治体労働者、市民、全国からのたくさんの人たちが参加しました。私たちのつくった「た

だの市民が戦車を止める」会が『戦車の前に座り込め——72年相模原闘争、そして』<sup>2</sup>がみ新聞労働組合、一九八〇年という本を書いて、これが宣伝されたこともあって、「ただの市民が戦車を止めた運動」という表現がされているかもしれません。

相模原市は神奈川県北部に位置し、広い面積をもっている都市で、最近政令指定都市になりました。人口も増えています。境川という名の小さな川を隔てて東京都町田市に隣接しています。戦車闘争のとき、私は町田市の団地に住んでいましたが、町田市民だとやりにくいと感じて、途中で戸籍上は相模原市民になっていた時期もあります。

相模原は、戦前から軍事都市でした。戦車闘争当時には、米陸軍相模補給廠、キャンプ座間、米陸軍医療本部、相模原住宅地、キャンプ淵野辺という五つの米軍基地がありました。キャンプ淵野辺は、戦車闘争の結果、現在では返還されて、跡地は宇宙科学研究所(ISSA)になっています。

相模補給廠は、今もそうですが、東洋一のアメリカ軍補給基地です。「ティッシュペーパーから戦車まで」と言われ、日常生活品の補給から戦車の修理まで行なっていました。補給廠の西門からは、JR横浜線を横切って真っ直ぐに幅広の市道が伸びていて、それが国道一六号にぶつかります。相模補給廠を出てきた戦車はそこを左折して横浜に行き、横浜港ノースピアからベトナムの戦場に送られていきます。戦車闘争では、西門から出た幅広の道路の両側にテント村ができました。日本共産党、日本社会党、地区労ほかさまざまな団体が結集しました。中核と革マルは向かい合ってテントを張っていました。婦人民主クラブの旗のすぐ横に「ベ平連」のテントがありました。私たち「ただの市民が戦車を止める」会は、桜美林大学現闘団、専修大学黒ヘル、和光高校、関東学院、現代中国研などと同じブロックに場所を確保し、テントを張りました。

テント村には、入れ代わり立ち代わりたくさんの人たちが入りし、夜になればまるで夏祭りの騒ぎのような状態になっていました。この一九七二年戦車闘争の経過を顧みて、いちばん大きな役割を果たしたのは社会党、とりわけ現地の社会党だったと思います。彼らが一九七二年五月の「五月闘争」で、補給廠から戦車を載せて出てきたトレーラーの前に立ちはだかつて運転手を説得して搬送を止めました。八月一四日に、米軍はM113兵員輸送車

二台の搬出を試みます。そのときに四三人の逮捕者が出ましたが、そのなかに道路パトロールカーの市役所の係員がいました。そこで当然ながら、「警察は何をやっているんだ」という強い批判が出たのです。

一九七二年は夏のミュンヘン・オリンピック（八月二十日・九月一日）の年で、テレビのオリンピック番組が通り済むと、周辺の住民は団扇片手に夏祭りのような格好で、相模補給廠の周りに集まってきました。彼らにとつて、機動隊がそこにいる人たちにどんなことをするかが目玉的だったのです。

『戦車の前に座り込め』の冒頭に、「ただの市民が戦車を止める」会の世話人の一人、梅林宏道さんが書いています。彼はある日出勤しようとして相模原駅のホームに行くと、歴史学者の和田春樹さんとバッタリ出会う。和田さんは、前夜から「ベ平連」のテントに泊まり込んでいて、梅林さんにこう話しかけます。「地元の人たちは、すごいですね。ぼくなんか、なまじ知っているものだから公務執行妨害にならないか、なんて考えてしまうのだけれど、機動隊員が誰かを連れてゆこうとすると、よってたかつて機動隊員の襟首や腕をつかんで逮捕されようとする人を奪還してしまうんですよ。素直な怒りの表現なんですわ。」（三三頁）

このときの住民の激しい怒りは、機動隊が、守るべき日本の市民に暴力を加えてベトナムに行く米軍戦車を保護、警護することに向けられていたと思われまます。

相模補給廠の周りを歩くと、補給基地の広大さがよくわかります。相模原市は日常的に日米安保条約のなかに入り、金網越しにベトナムの戦場で傷ついた戦車が並んでいる。ときにはもぎ取られた手足が転がっている。こういう光景がずっとありました。

ベトナム反戦市民運動が全世界的に繰り広げられるなか、相模原市議会でこの現実の問題ではないかという議論がありました。ときの防衛庁長官は「ベトナムの戦場で壊れた戦車が日本の基地で修理されてベトナムの戦場に再び行く。これを保証することが日米安保の義務だ」と言明しています。

ところが、当時の横浜市長は社会党の飛鳥田一雄さんでした。後に社会党委員長になる人です。国道一六号を通って横浜港ノースピアに運ばれる重戦車M48を、ノースピア入口の村雨橋で社会党員と労働組合の人たちが止めてしまった。一九七二年八月五日のことです。飛鳥田市長が、村雨橋は重戦車の重量に耐えられない、車両制限令に違反すると日本の法律を盾にとつたのです。五月闘争では社会党員が補給廠から出てくる戦車の前に立ちふさがって実力で止めましたが、実力闘争にも限界があることを知り、合法闘争に切り替えたわけです。さすがの米軍も日本の法律に違反しきれず、村雨橋からすぐ戻ってきました。それから一月八日までの約百日間、ベトナムに行く戦車は補給廠を出ることができなくなったのです。

#### 「ただの市民が戦車を止める」会

私たちの「ただの市民が戦車を止める」会は、出遅れた住民の集まりでした。「ベ平連」は知識人、文化人が中心になっていたと思いますが、「ただの市民が戦車を止める」会はそうではありません。若い人たちから年配の人まで、工場労働者、市役所職員、パチンコ釘師、鳶職、集金人、傷痍軍人、主婦、学生等々でした。組織ではないので、ルールもありません。毎日毎晩デモをすることをずっと繰り返してきました。たまたま梅林さんも私も物性物理学の研究者だったので、私たちが「ただの市民」と言っても当時からすでに批判がありました。しかし、私たちは、専門的なことを一切抜きにして、「ベトナム戦争に反対する」「ベトナムに戦車を送ることに反対する」「相模補給廠を解体すべきである」という三つのスローガンの下に人々の集まる場所をつくろうとしたのです。

いまの若い人たちにはわかりにくいことですが、当時は自動販売機が普及していませんから、水を飲むことがなかなかたいへんでした。いちばん困ったのはトイレです。西門商店街のトイレを借りたり、歩いて一〇分の相模原駅のトイレを利用したりしました。トイレと飲み水を地元の住民として何とかしようと考えました。人がある目的で何かをしようとするときに、基本的に必要なインフラストラクチャーを地元住民は提供する役割があると思つたからです。

こうして「ただの市民」の集まりは、外からやってきたテント村の人たちに頼られる存在になっていきました。相模原警察署は、補給廠西門から真っ直ぐに伸びた道路が国道一六号と交差する角にありました。テント村の人々



1972年10月の筆者(中央でマイクを持っている).  
(撮影・田中昭)

と警察はしょっちゅう衝突して、逮捕者が出ます。すると、逮捕者の関係者は「ただの市民が戦車を止める」会のテントにやってきて、あなた方は地元の人だから、中心になって警察に抗議してくれと求めるのです。ちょうど夏休みでしたが、連日のように、真夜中まで相模原警察署に抗議に行き、「面会させろ」とか「差し入れさせろ」といった要求をする行動がつづきました。「会」の何人かは、ほとんど自分たちの生活がなくなるような状態でした。そして、M113兵員輸送車が強行搬出されるという情報が入るや、座り込んで阻止しようと、一九七二年九月一八日から一九日にかけて、テント村の西門交差点を中心におよそ八千人といわれる人々が集まりました。

当時の映像や写真を見ると、座り込んでいる若い人々が深夜になると恐怖におののいた顔をしています。機動隊に対する恐怖心です。おかしな話ですが、ベトナムの人たちと連帯して、戦車をベトナムに送らないという日本人市民の闘いは、まず機動隊との闘いでした。

一九七二年一〇月一七日、日本政府は閣議で車両制限令を改定し、翌一八日に施行、その結果米軍車両はフリーパスとなります。一一月八日、M48重戦車の搬出の再開に際して、阻止する側はほとんど手出しができずに機動隊の壁にのまれてしまいます。

こうして戦車闘争が終わりますが、その後の運動をどう展開するか悩み考えました。日本の米軍基地がベトナム戦争への加担を減らす方向に行くのかどうか監視する必要があると考えて、多くの団体と一緒に相模補給廠に入りする戦車車両、軍事物資積載車両を丸二年間克明に監視、記録する運動へと移っていきました。昼間の監視は比較的楽ですが、徹夜での作業はたんへんでした。周辺住民からは、夜食の差し入れが行なわれました。日本の警察

からは監視活動にさんざんな嫌がらせを受けました。

この二年間の監視記録を見ると、世界情勢と補給廠との関連がじつによく現れているのです。軍事問題の専門家たちからは高い評価を受けました。

### 三〇年後のベトナム訪問

シングル・イツシユエの市民運動には、どこで終わるかという問題があります。「ベ平連」の運動は、総括を出して解散宣言しましたが、「ただの市民が戦車を止める」会は解散宣言を出せませんでした。ただ、個人的には、ある一つの区切りを感じたことがあります。

二〇〇二年二月末に、旧「ベ平連」のメンバーが日本のベトナム反戦活動の資料を携えてベトナムを訪問しました。その二カ月後、今度はベトナム平和団体連合会と平和委員会が日本から二〇人を招待するということになりました。吉川勇一さんから相模原闘争の代表として一緒に来てくれと連絡がありました。私は三里塚闘争に深く関わったので、「成田から飛行機に乗るわけにはいかない」と断りましたが、吉川さんは「関西空港から行けばいい」と言います。説得された格好で関空経由でベトナムまで行きました。吉川さんは律義な方で、私と一緒に往復とも関空を使ったのです。

ホーチミン市の戦争証跡博物館では、M48重戦車が展示してありました。私は、一九七二年一一月八日に相模補給廠から搬出されたM48重戦車を思わずにはいられませんでした。私たちはなす術もなくそれをベトナムに送ってしまった。そのことにずっと敗北感を抱いていました。ところが、わたしたちの闘いはまったくの無力ではなかったことが、ベトナムを訪問した年の秋にアメリカ側の資料から判明しました。「ただの市民が戦車を止める」会で一緒に闘った梅林宏道さんは、アメリカの公文書館に足を運び、情報公開された資料を分析することを続けていますが、新たに公開された極秘公電から、戦車闘争によって米軍が望まざる予定変更を強いられ、大きな打撃を与えられていたことを突き止めたのです〔梅林宏道「雪崩現象を恐れた米政府」『季刊アゴラ』アゴラさがみはら編集委員

私たちの闘いが米軍に予想以上に大きな影響を与えていたことには驚きましたが、実はそれ以上に驚いたのは、このベトナム訪問中に聞いた話でした。ホーチミン市の郊外のクチというところには、解放戦線が地下に何層もの巨大なトンネルを掘って隠れていた場所があります。そこに案内されるバスの中で、通訳兼案内役のグエン・コン・タンさんから三つの質問をされました。一つめは、「総延長二五〇キロにもなる地下トンネルを掘った土をどこへ捨てたと思うか」。二つめは、「米軍は二千頭もの犬を使って、空気抜きの穴を探そうとする。そこから水や薬物を入れられたらひとたまりもない。見つけられないためにどんな工夫をしたか」です。この二つは何とか考えることができました。ところが三つめがわからない。「南ベトナムでは雨季が半年あって、穴に潜っている解放戦線の兵士たちもさすがにくさくさしてくる。そこへ夕方になるとヘリコプターが飛んできて、子どもや若い女性の声で呼びかける。「お父さん、あなた、早く家に帰ってよ、そんなところにはいないで。寂しいよ」と。そういう誘惑にどうやって耐えることができたか」。私たちが答えに迷っていると、タンさんがその答えを教えてくださいました。「誘惑に耐えられたのは、皆さんの闘いがあつたからです。地下で聞くラジオがときどき報じました。アメリカの市民も私たちを支持している、日本では市民たちが戦車を止めている、と。私たちはこの戦いは絶対に勝てる」と確信しました。山口幸夫「ベトナムで見たこと、考えたこと」、相模補給廠監視団『監視団ニュース』三〇四号、二〇〇二年七月一日

小田実さんが慶應義塾大学の講義でこのエピソードを紹介したことは、飯田裕康・高草木光一編『生きる術としての哲学——小田実最後の講義』岩波書店、二〇〇七年に記述されています。吉川勇一さんの『民衆を信ぜず、民衆を信じる』(第三書館、二〇〇八年)のなかにも紹介されています。ベトナムに行く機会がある方は、ぜひホーチミン市の戦争証跡博物館に寄ってください。相模原戦車闘争のさまざまな記録も展示してあります。

では、「ただの市民が戦車を止める」会はその後どうなったのか。この点についてもお話ししておかなければなりません。相模補給廠を徹夜で監視した人たちの運動は現在でも相模補給廠監視団として続いています。日本全国の反基地運動の中心を担っている人たちが、この運動のなかにいます。おそらく誰よりも詳しく米軍基地や自衛隊基地を知悉した人たちです。沖縄の基地問題についても運動の対象にしています。

あとで丁寧にお話ししますが、「くらしをつくる会」というグループができました。これは合成洗剤追放運動、三里塚の無農薬、有機農法の野菜づくりを支える運動へとつながっています。闘争が終わればそれで運動が終わるのではなく、日常の暮らしがどうあるべきかを考え続けなければいけないという人たちが出てきたわけです。

昨年(二〇〇九年)秋、急逝した菅沢宣夫さんは、「ただの市民が戦車を止める」会に初期の頃から参加していた建築家です。この人は、戦車闘争が終わった後、「根拠地に根づく」という考え方から再出発して、都市空間と農空間のあり方を探って「青空農園」をつくりました。建築家として、建物をつくるだけでなく、空間的な文化を創造することを大きなテーマとしていました。その試みは、お子さんの一人が継いで仲間たちと一緒にやっています。相模川の河口堰反対運動に加わった人たちもいます。渡り鳥や川岸の植生が受ける影響を調査、追跡して、環境保護運動とくに水問題に集中して取り組んでいます。八ッ場ダム建設反対運動にも深く関わっている人たちです。梅林さんは、世界の反核運動の中心で活躍しています。

#### 相模原と三里塚

一九六二年、レイチェル・カーソンは『沈黙の春』でDDTはじめ合成化学物質は「いのち」を蝕むという警告を發しました。戦車闘争の後、この本を読む女性たちのグループが生まれました。この本では、「生む性」としての女性が、現代社会の利便性にどう向き合うかという問題が出されていたと思います。そうした問題意識で見ると、戦車闘争も三里塚闘争も男たちの運動だったのではないかという反省があるのです。男は男として生まれ育つ過程でごく自然に女を差別する存在になる。そこに根源的な問題があるのではないか。

彼女たちがその頃掘りどころにしたのが婦人民主クラブでした。一九四六年、GHQから日本でも婦人解放の運動体をつくるべきだという声がかかり、松岡洋子さん、宮本百合子さん、佐多稲子さん、羽仁説子さんたちの呼び